

Y19a

ドーム型スクリーンに投影する天体画像への臨場感・没入感に関する研究- 2 - 恵まれた星空環境に属する視聴者に、デジタルデータの星空はどのように評価されるのか

松岡葉月 (国立民族学博物館), 村田拓也 (りくべつ宇宙地球科学館), 阪本成一 (国立天文台)

恵まれた星空環境に属する視聴者に、デジタルデータの星空はどのように評価されるのか。この問題意識から、国内有数の星空環境をもつ北海道陸別町の「りくべつ宇宙地球科学館」の4 mエアドームにおいて、臨場感・没入感の観点から調査を行った。今回も前回と同様に発表者らが制作したプラネタリウム番組「誰も知らなかった星座～南米天の川の暗黒星雲」に用いている天体画像を用い、5 か月間の上映期間中に一般視聴者からアンケートで回答を得た。前回の調査では、異なるドーム径やプロジェクター性能を持つ上映館でのアンケート結果の比較を通じて、画像精細度の高さは臨場感や没入感に部分的にしか影響しないこと、画像の精細度よりもドーム径が臨場感・没入感に影響する傾向が見られること、臨場感・没入感には視聴者の心理的側面や地域性などの環境要因の影響も見られることなどが明らかになってきた(松岡ほか、日本天文学会 2014 年春季年会)。これを踏まえて引き続き、物理・環境要因(元画像画素値、プロジェクター性能、ドーム径、立地条件など)と人的要因(視聴者の年齢、プラネタリウム経験、天体に関する知識・関心など)に着目し、これらの要因を臨場感・没入感に照らし合わせて研究を進めている。特筆すべき視聴者の背景は、都市部から遠いという当館の立地条件から、星を見るために来るという目的意識が極めて強く、天体望遠鏡の経験率も前年度までの上映館よりも特出して高い点である。講演では、特に環境要因の影響を考慮しつつ、当館の人的、および物理・環境要因と、臨場感・没入感の関連について紹介し、恵まれた星空環境でのドーム映像の果たす意味や効果について論じる。